

通信制高校における不登校経験者のその後の適応

—不登校期間、不登校時の心身の状態に着目して—

金子 恵美子*・伊藤 美奈子**

(* 奈良女子大学大学院人間文化研究科(博士後期課程)共生自然科学専攻)
(** 奈良女子大学大学院生活環境科学系)

要約：本研究では、A通信制高校生373名を対象に質問紙調査を行い、その中でも特に不登校経験者216名に着目し、不登校経験(時期、期間、心身の状態)とその後の適応(高校出席状況、不登校への今の気持ち)との関連、不登校経験による成長について検討を行った。

1) A通信制高校生の約6割が不登校経験者であり、不登校期間が1年未満の生徒は約3%と少なく、1年以上の継続した不登校経験がある生徒が多く見られた。不登校時の心身の状態としては、「家での暴力や反抗」を約8割、「身体症状」「抑うつ状態」「昼夜逆転や生活の乱れ」を約5～6割の生徒が経験していた。2) 不登校経験者の約8割は高校での出席が良好であり、約半数は「もう不登校時代に戻らないと思う」と回答していたが、こうしたその後の適応状況には、不登校時の「ひきこもり」「無気力」「抑うつ状態」「昼夜逆転や生活の乱れ」の有無によって差が見られることが示唆された。3) 「もう不登校時代に戻らないと思う」生徒は、「いつ戻るかわからない」生徒に比べ、不登校経験を自分が成長した機会と捉えていることが示唆された。

キーワード：通信制高校、不登校経験者、適応、心身の状態

問題と目的

通信制高校は、「全日制・定時制の高校に通学することができない青少年に対して、通信の方法により高校教育を受ける機会を与える」と創設の趣旨が述べられ、就業等のために全日制高校に進学できない青年に機会を提供するものとして制度化されてきたが、近年では、全日制課程からの進路変更等による転編入学者・中途退学経験者、小中学校での不登校経験者など多様な入学動機を持つ生徒が多くなり、制度が作られた当初とは異なった様子が見られることが指摘されている(文部科学省, 2013)。公益財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会(2012)によると、通信制高校生のうち正社員、パート等で働きながら学ぶ生徒の割合は昭和57年度には67.8%、平成6年度には53.6%と半数を超えていたが、平成23年度には35.4%となっている。さらに、そのうち定職者の割合は、昭和57年度は61.3%であったが、平成6年度は29.3%、平成23年度は7.1%と大きく減少してきており、就業しながら学ぶ

という状況が変化してきていることがうかがえる。また、通信制高校を選択した生徒の入学動機は多様であり、同じく公益財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会(2012)の調査では、「高等学校の卒業資格が必要だと思ったから」(45.8%)が最も多く選択されていたが、次いで「自分のペースで学習がすすめられると思ったから」(17.7%)が多く、「経済的に働く必要があったから」(5.4%)、「全日制高等学校を受験したが、合格しなかったから」(5.2%)、「全日制高校を受験したかったが、合格する自信がなかったから」(2.9%)といった動機を上回っている。その他、「健康・身体的理由により毎日通学することができないので」(8.6%)、「経済的には問題がないが、働きながら学ぶことに意義があると思ったから」(3.9%)、「時間にゆとりを持って勉強をしたいと考えたので」(3.1%)など、それぞれの生徒の事情やペースに合わせて選択しており、就業により全日制高校に通えないから、全日制高校に合格できないからという動機ではなく、生徒個人の多様な事

情に合わせて積極的に通信制高校を選択しているものと考えられる。通信制高校は、全日制高校では合わないと感じた生徒、従来の学校の枠組みに不安を感じる生徒など多様なニーズを持つ生徒を柔軟に受け入れる場として期待されているものと考えられる。また、文部科学省(2013)によると、高等学校(全日制、定時制、通信制)の総数や生徒数は減少しているにもかかわらず、通信制高校は平成16年度には152校であったものが平成24年度には217校に増加し、生徒数も増加していることが指摘されており、通信制高校の必要性が高まってきていると考えられる。

不登校経験者も多く受け入れている通信制高校であるが、通信制高校での不登校経験者のその後の適応にはどのような要因が関連しているのだろうか。これまで不登校の予後については多くの研究が行われている。小林・鈴木(1990)は、「反抗・強迫傾向」(自尊心が高い、反抗的、几帳面)が最も改善に関連し改善率が低いこと、「耐性欠如」「神経過敏傾向」の回復が改善に必要なことを示唆している。また、岩本(1996)は、発症が低年齢である場合や、生活リズムも比較的規則的で行動や対人交流の範囲に極端な変化のない場合、同年齢小集団の友人がいて同性同年齢の親友を持っている場合は再登校する可能性が高いこと、小林・田中・神村(1995)は、対人関係の促進によって対人積極性を増すこと、神経症傾向・非行傾向を減少することが改善に関連することを指摘している。また、斎藤(2000)は、抑うつ症状、家庭内暴力、妄想関連症状を示した者に中学卒業後10年後の不適應の比率が高いことを指摘している。以上から、対人関係面の適応、生活リズム、反抗的な傾向、家庭内暴力、非行傾向、抑うつ症状、神経症傾向など不登校時に見られる心身の状態がその後の適応に関連することが推測される。

そこで、本研究では、広域通信制高校であるA通信制高校に通う生徒を対象として、そこに通う小中学校での不登校経験者の不登校経験(時期、期間、心身の状態)とその後の適応状況(高校出席状況、不登校への今の気持ち)との関連について検討を行う。また、不登校に対

する今の気持ちと不登校経験による成長に焦点をあてた検討も行う。

方 法

1. 調査方法 質問紙調査
2. 調査時期 2015年3月
3. 調査対象 A通信制高校1～3年生373名(1年生132名、2年生121名、3年生119名、不明1名)。A通信制高校は広域通信制高校であり、全国に複数のキャンパスがあるが、今回対象としたのは関東にある1キャンパスである。生徒の興味関心に合わせた選択ができるよう複数のコースが設けられている。また、転編入学する生徒もあり、今回の分析対象者373名のうち41名(11.0%)が転編入生であった。
4. 調査内容
 - (1) 不登校経験の有無
 - (2) 不登校の時期 小学1年生～高校3年生の各時期について選択を求めた。
 - (3) 不登校の期間の長さ
 - (4) 不登校時の心身の状態(伊藤・小澤・安田・星野・福智・近兼・原・鶴岡, 2013)「ひきこもり」、「無気力」、「身体症状」、「抑うつ状態」、「家での暴力や反抗」、「昼夜逆転や生活の乱れ」の6項目。3段階評定(「強くあった」「少しあった」「なかった」)。
 - (5) 不登校への今の気持ち(伊藤ら, 2013)「もう不登校時代に戻らないと思う」「いつ戻るかかわからない」「考えない、考えないようにしている」からあてはまるもの1つを選択。
 - (6) 不登校経験による成長 伊藤ら(2013)の11項目に家族、友人、先生のサポートへの感謝3項目を加えた14項目。4段階評定。
 - (7) 現在の登校状況 片岡(1993)を参考に作成。5段階評定(「ほとんど休まない」「月に1～2回」「週に1～2日」「週に3～4日」「毎日休む」)。
 - (8) フェイスシート(学年、所属コース、転編入)

結 果

1. 不登校経験

1) 不登校経験の有無

小中学校で不登校経験がある生徒は、373名のうち216名(57.9%)であった。

2) 不登校の時期、期間

不登校の時期について、小学1年生～中学3年生の各時期の状況をまとめたものが表1である。小学校で学校を休んでいた生徒は、小学校1～4年生までは約2～7%と少ないが、小学5年生では14.8%、小学6年生では18.5%であった。さらに中学1年生では不登校経験者のうち約4割が学校を休んでいた。中学2、3年生ではさらに増え、不登校経験者のうち約7割の生徒がその時期に休んでいた。

表1 不登校の時期

	人	(%)
小学1年生	4	(1.9)
小学2年生	4	(1.9)
小学3年生	6	(2.8)
小学4年生	15	(6.9)
小学5年生	32	(14.8)
小学6年生	40	(18.5)
中学1年生	85	(39.4)
中学2年生	153	(70.8)
中学3年生	163	(75.5)

次に、不登校の期間の長さについてたずねた結果を「1年未満」「1年以上2年未満」「2年以上3年未満」「3年以上」に分類しまとめたものが表2である。「1年未満」だった生徒は、約3%と少なく、「1年以上2年未満」「2年以上3年未満」だった生徒がそれぞれ約2割、「3年以上」だった生徒が約1割という結果だった。5年を超える生徒も7名おり、最も長い生徒で5年9ヶ月であった。また、約半数の生徒が未

回答であるが、正確な期間がわからないという生徒も少なくなかった。

表2 不登校の期間

	人	(%)
1年未満	6	(2.8)
1年以上2年未満	42	(19.4)
2年以上3年未満	44	(20.4)
3年以上	20	(9.3)
未回答	104	(48.1)

3) 不登校時の心身の状態

不登校時の心身の状態として、「1. ひきこもり」、「2. 無気力」、「3. 身体症状」、「4. 抑うつ状態」、「5. 家での暴力や反抗」、「6. 昼夜逆転や生活の乱れ」の6項目の有無についてたずねた結果をまとめたものが表3である。「強くあった」と回答した割合が最も高かったのは、「5. 家での暴力や反抗」で約6割、続いて「3. 身体症状」が約4割、「1. ひきこもり」「4. 抑うつ状態」「6. 昼夜逆転や生活の乱れ」も約3割の生徒が選択していた。最も割合が少なかったのは、「2. 無気力（やる気が出ない）」(15.7%)であった。「少しあった」という回答も含めると、いずれの状態も約半数～8割の生徒が経験している。

2. 高校出席状況と不登校経験(期間、状態)との関連

不登校経験のある生徒の回復状況を検討する指標として、まず高校での出席状況に着目した。

表3 不登校時の心身の状態

	人 (%)		
	強くあった	少しあった	なかった
1. ひきこもり(家から外に出られない)	76 (35.2)	56 (25.9)	80 (37.0)
2. 無気力(やる気が出ない)	34 (15.7)	66 (30.6)	114 (52.8)
3. 身体症状(頭痛・腹痛・吐き気など)	88 (40.7)	47 (21.8)	79 (36.6)
4. 抑うつ状態(ひどく落ち込む・気分が滅入る)	66 (30.6)	54 (25.0)	90 (41.7)
5. 家での暴力や反抗	137 (63.4)	47 (21.8)	28 (13.0)
6. 昼夜逆転や生活の乱れ	60 (27.8)	47 (21.8)	104 (48.1)

1) 高校出席状況と不登校経験の有無

高校での出席状況について、「ほとんど休まない」「月に1～2回」を出席良好、「週に1～2日」「週に3～4日」「毎日休む」を出席不良として分類し、不登校経験の有無による相違を検討したところ(表4)、不登校経験による差が見られ($\chi^2(1)=24.01, p<.01$)、不登校経験がある生徒のほうが出席不良である生徒の割合が高かった。

表4 高校出席状況と不登校経験 人(%)

	不登校経験 あり (N=216)	不登校経験 なし (N=157)
登校良好	174 (80.6)	153 (97.5)
登校不良	42 (19.4)	4 (2.5)

2) 高校出席状況と不登校の期間

不登校経験がある生徒についてさらに詳細に検討するため、不登校の期間(1年未満, 1年以上2年未満, 2年以上3年未満, 3年以上)による高校での出席状況(登校良好, 登校不良)の相違について検討したところ、有意な差は見られなかった。

3) 高校出席状況と不登校時の心身の状態

不登校時の心身の状態(「1. ひきこもり」「2. 無気力」「3. 身体症状」「4. 抑うつ状態」「5. 家での暴力や反抗」「6. 昼夜逆転や生活の乱れ」)の

有無による高校での出席状況(登校良好, 登校不良)の相違について検討を行った(表5)。不登校時の心身の状態については、「1. ひきこもり」「2. 無気力」「3. 身体症状」「4. 抑うつ状態」「5. 家での暴力や反抗」「6. 昼夜逆転や生活の乱れ」のそれぞれに「強くあった」「少しあった」と回答した生徒を「状態あり」「なかった」と回答した生徒を「状態なし」と分類した。 χ^2 検定の結果、「6. 昼夜逆転や生活の乱れ」の項目についてのみ差が見られ($\chi^2(1)=4.76, p<.05$)、不登校時に昼夜逆転や生活の乱れが見られた生徒に高校で登校不良な状態にある生徒が多く見られた。

3. 不登校に対する今の気持ちと不登校経験(期間, 状態)との関連

次に、不登校経験のある生徒の回復状況を検討する指標として、不登校に対する今の気持ち(「もう不登校時代に戻らないと思う」「いつ戻るかわからない」「考えない、考えないようにしている」)に着目して検討を行った。

1) 不登校に対する今の気持ち

不登校経験者に不登校に対する今の気持ちをたずねた結果、不登校経験のある生徒216名のうち、「もう不登校時代に戻らないと思う」と回答した生徒は100名(46.3%)、「いつ戻るかわからない」と回答した生徒は37名(17.1%)、「考えない、考えないようにしている」と回答

表5 高校出席状況と不登校時の心身の状態

		人(%)		
		登校良好	登校不良	χ^2 値
1. ひきこもり	状態なし	65 (85.5)	11 (14.5)	2.13
(家から外に出られない)	状態あり	105 (77.2)	31 (22.8)	
2. 無気力	状態なし	28 (82.4)	6 (17.6)	0.10
(やる気が出ない)	状態あり	144 (80.0)	36 (20.0)	
3. 身体症状	状態なし	70 (79.5)	18 (20.5)	0.07
(頭痛・腹痛・吐き気など)	状態あり	102 (81.0)	24 (19.0)	
4. 抑うつ状態	状態なし	52 (78.8)	14 (21.2)	0.09
(ひどく落ち込む・気分が滅入る)	状態あり	116 (80.6)	28 (19.4)	
5. 家での暴力や反抗	状態なし	110 (80.3)	27 (19.7)	0.00
	状態あり	60 (80.0)	15 (20.0)	
6. 昼夜逆転や生活の乱れ	状態なし	54 (90.0)	6 (10.0)	4.76*
	状態あり	116 (76.8)	35 (23.2)	

*: $p<.05$

した生徒は 77 名 (35.6%) であった。

2) 不登校に対する今の気持ちと不登校の期間

不登校に対する今の気持ちについて、不登校の期間 (1 年未満, 1 年以上 2 年未満, 2 年以上 3 年未満, 3 年以上) による相違を検討したところ、有意な差は見られなかった。

3) 不登校に対する今の気持ちと不登校時の心身の状態

不登校に対する今の気持ちについて、不登校時の心身の状態 (「1. ひきこもり」「2. 無気力」「3. 身体症状」「4. 抑うつ状態」「5. 家での暴力や反抗」「6. 昼夜逆転や生活の乱れ) の有無に

よる相違を検討した (表 6)。不登校時の心身の状態については、「強くあった」「少しあった」と回答した生徒を「状態あり」, 「なかった」と回答した生徒を「状態なし」と分類した。 χ^2 検定の結果, 「1. ひきこもり」($\chi^2(2) = 21.29, p < .01$), 「2. 無気力」($\chi^2(2) = 9.31, p < .05$), 「4. 抑うつ状態」($\chi^2(2) = 10.68, p < .01$) の項目について差が見られ、不登校時にひきこもり、無気力、抑うつ状態がそれぞれ見られた生徒に「いつ戻るかわからない」「考えない、考えないようにしている」という生徒の割合が多かった。

表 6 不登校に対する今の気持ちと不登校時の心身の状態

人 (%)

		不登校時代に 戻らない	いつ戻るか わからない	考えない	χ^2 値
1. ひきこもり	状態なし	51 (67.1)	5 (6.6)	20 (26.3)	21.29**
(家から外に出られない)	状態あり	48 (35.6)	32 (23.7)	55 (40.7)	
2. 無気力	状態なし	24 (70.6)	3 (8.8)	7 (20.6)	9.31*
(やる気が出ない)	状態あり	75 (42.1)	34 (19.1)	69 (38.8)	
3. 身体症状	状態なし	45 (51.7)	10 (11.5)	32 (36.8)	3.69
(頭痛・腹痛・吐き気など)	状態あり	55 (43.7)	27 (21.4)	44 (34.9)	
4. 抑うつ状態	状態なし	41 (63.1)	6 (9.2)	18 (27.7)	10.68**
(ひどく落ち込む・気分が滅入る)	状態あり	57 (39.6)	31 (21.5)	56 (38.9)	
5. 家での暴力や反抗	状態なし	69 (50.7)	19 (14.0)	48 (35.3)	3.97
	状態あり	30 (40.0)	18 (24.0)	27 (36.0)	
6. 昼夜逆転や生活の乱れ	状態なし	36 (60.0)	8 (13.3)	16 (26.7)	5.76
	状態あり	63 (41.7)	29 (19.2)	59 (39.1)	

** : $p < .01$ * : $p < .05$

4. 不登校に対する今の気持ちと不登校経験による成長

不登校に対する今の気持ち (「もう不登校時代に戻らないと思う」「いつ戻るかわからない」「考えない、考えないようにしている」) によって、不登校経験による成長の実感にどのような相違があるのかについて検討を行った (表 7)。不登校経験による成長に関する 14 項目の平均得点は、「1. 家族の大切さやありがたさがわかった」「3. 自分自身を見つめ直すことができた」「12. 休んでいたときの家族のサポートに感謝している」など、不登校経験から何らかの

成長を感じたり、不登校経験をポジティブにとらえる項目では「もう不登校時代に戻らないと思う」と回答している生徒の平均得点が 3 点を超え、「いつ戻るかわからない」「考えない、考えないようにしている」と回答した生徒に比べ高い傾向にあるのに対し、「6. 学力・勉強面で遅れてしまったと思う」「7. 希望通りの進路(学校や仕事)に進めなかった」など不登校を経験したことによる不利益や後悔に関する項目では「いつ戻るかわからない」「考えない、考えないようにしている」と回答した生徒のほうが平均得点が高い傾向を示している。不登校に対する

今の気持ちによる相違を詳細に検討するため、独立変数を不登校に対する今の気持ち、従属変数を不登校経験による成長14項目の得点とする一要因の分散分析を行った結果(表7)、「3. 自分自身を見つめ直すことができた」($F(2, 204) = 5.60, p < .01$)、「4. 休んだ期間があるからこそ今の自分があると思えた」($F(2, 204) = 10.22, p < .01$)、「5. いろいろな人と出会えた」($F(2, 204) = 4.09, p < .05$)の項目でそれぞれ有意差が見られ、Tukey法による多重比較

の結果、「3. 自分自身を見つめ直すことができた」「5. いろいろな人と出会えた」の項目では、「もう不登校時代に戻らないと思う」生徒の得点が「いつ戻るかわからない」生徒の得点より有意に高く、「4. 休んだ期間があるからこそ今の自分があると思えた」の項目では、「もう不登校時代に戻らないと思う」生徒の得点が「いつ戻るかわからない」「考えない、考えないようにしている」生徒の得点より有意に高かった。

表7 不登校経験による成長の平均と分散分析結果

	不登校時代に 戻らない	いつ戻るか わからない	考えない	F 値
1. 家族の大切さやありがたさがわかった	3.27 (.87)	2.95 (.88)	2.97 (1.05)	n.s.
2. 人の気持ちや痛みを理解できるようになった	3.06 (.93)	2.81 (.92)	2.93 (.95)	n.s.
3. 自分自身を見つめ直すことができた	3.24 (.82)	2.68 (1.03)	2.93 (1.00)	5.60**
4. 休んだ期間があるからこそ今の自分があると思えた	3.31 (.89)	2.51 (1.15)	2.85 (1.02)	10.22**
5. いろいろな人と出会えた	3.16 (.96)	2.62 (1.11)	2.85 (1.10)	4.09*
6. 学力・勉強面で遅れてしまったと思う	3.41 (.78)	3.59 (.69)	3.57 (.78)	n.s.
7. 希望通りの進路(学校や仕事)に進めなかった	2.39 (1.10)	2.73 (1.12)	2.58 (1.03)	n.s.
8. 友だちが少なくなった	2.13 (1.06)	2.38 (1.09)	2.09 (1.11)	n.s.
9. 家族に心配や迷惑を掛けたと思う	3.33 (.82)	3.41 (.89)	3.41 (.84)	n.s.
10. 中学校での思い出が作れなかった	2.55 (1.05)	2.59 (1.26)	2.46 (1.13)	n.s.
11. 無理して学校に行かなくてよかった	2.67 (1.09)	2.76 (.96)	2.54 (1.10)	n.s.
12. 休んでいたときの家族のサポートに感謝している	3.32 (.83)	2.97 (.99)	3.14 (1.01)	n.s.
13. 休んでいたときの友人のサポートに感謝している	2.75 (1.05)	2.57 (1.09)	2.68 (1.18)	n.s.
14. 休んでいたときの先生のサポートに感謝している	2.82 (1.17)	2.65 (1.16)	2.81 (1.25)	n.s.

** : $p < .01$ * : $p < .05$

考 察

本研究では、通信制高校に通う生徒、特に小中学校における不登校経験者に着目し、その不登校経験(時期、期間、心身の状態)と不登校からの回復状況(高校出席状況、不登校に対する今の気持ち)との関連、不登校に対する今の気持ちと不登校経験による成長との関連について検討した。

1. 不登校経験について

通信制高校は多くの不登校経験者を受け入れ

ていることが指摘されているが(文部科学省, 2013)、本研究においても約6割の生徒が不登校経験者であり、A通信制高校でも多くの不登校経験者を受け入れていることがうかがえた。不登校を経験した生徒の不登校の時期は、小学校1～4年生は1割未満にとどまっているが、小学校高学年から少しずつ増加し、中学1年生では小学6年生の倍以上の生徒が不登校となっていた。さらに中学2, 3年生は不登校経験者の中でも約7割が欠席しており、文部科学省(2014)で指摘されている、学年が上がるにつれて不登

校生徒が増え、特に中学1年生の時期の増加が著しく、中学2、3年生で不登校が多く見られるという傾向と一致する結果であった。

次に、それぞれの生徒の不登校期間の長さについては、休んでいた期間が1年未満だった生徒は約3%と少なく、1年以上が多くを占め、3年以上という長期にわたる不登校も約1割と少なくなかった。不登校期間の長さについては、約半数の生徒が未回答となっていた。生徒の中には休み始めた学年は覚えているものの、いつ頃の時期に自分が学校にほぼ登校できなくなってしまったのかを明確には覚えていないという生徒も少なくないこと、また不登校に対して「考えない、考えないようにしている」という生徒も約35%となっていることから、明確に期間を記入できなかった生徒が多かったものと思われる。

不登校時の心身の状態については、先行研究(小林ら, 1990; 岩本, 1996; 小林ら, 1995; 斎藤, 2000)においても不登校の予後に関わる要因として指摘されている「ひきこもり」、「無気力」、「身体症状」、「抑うつ状態」、「家での暴力や反抗」、「昼夜逆転や生活の乱れ」についてどれくらいあてはまるかをたずねたところ、「家での暴力や反抗」を経験している生徒が最も多かった。特に「家での暴力や反抗」が「強くあった」と回答している生徒の割合は、他の項目に「強くあった」と回答している生徒に比べ多さが際立っており、不登校状態にある子どもたちにとって「家での暴力や反抗」の問題が非常に深刻であることが推測され、不登校の子どもたちを支える家族への支援においても子どもの暴力や反抗にどのように対応していくかをともに考えていくことが重要であると思われる。また、「身体症状」「抑うつ状態」「昼夜逆転や生活の乱れ」を経験している不登校経験者も多いことから、こうした様子を不登校の予兆としても重視することが必要であると思われる。

2. 不登校からの回復状況と不登校期間、不登校時の心身の状態との関連

不登校経験のある生徒の回復状況を表す指標として、高校での出席状況と不登校に対する今の気持ちの2つを取り上げ、不登校期間の長さ、

不登校時の心身の状態との関連を検討した。

まず、高校での出席状況は、不登校経験のない生徒のほうが不登校経験のある生徒に比べ登校良好な生徒が多いが、不登校経験のある生徒でも約8割の生徒は高校では良好な登校状況にあることが示唆され、小中学校で不登校であった生徒でも通信制高校において不登校から回復していくことが示唆された。また、不登校に対する今の気持ちについても、「いつ戻るかわからない」と考えている生徒は約2割にとどまり、約半数の生徒が「もう不登校時代に戻らないと思う」と回答していることから不登校からの回復に自信を深めている生徒が多いことがうかがえる。一方で、「考えない、考えないようにしている」という生徒が約35%おり、不登校経験について考えないようにすることで、目の前の学校生活に適応するために努力している生徒の姿も推測される。

高校での出席状況、不登校に対する今の気持ちのいずれも、不登校期間の長さによる差は見られず、本研究の対象となった不登校経験者においては不登校の回復状況は不登校期間の長さにはよらないことが示唆された。このことは、A通信制高校の教員による不登校経験者へのきめ細やかなサポートや、不登校経験者でも学習に取り組みやすくなるための少人数制授業や生徒の興味関心に合わせた授業などの工夫、同じ不登校経験者が多い環境などが関連し、学校へ復帰する際の不登校経験者の困難を和らげ、不登校期間が長かった生徒でも登校を継続しやすい状況となっているのではないと思われる。不登校期間が長いほど、高校に通い始める当初の不安感や抵抗感は大いと考えられるため、継続した支援が重要になると思われる。

次に、不登校時の心身の状態（「ひきこもり」「無気力」「身体症状」「抑うつ状態」「家での暴力や反抗」「昼夜逆転や生活の乱れ」）と不登校からの回復状況との関連について検討した結果、高校での出席状況は、「昼夜逆転や生活の乱れ」の項目でのみ差が見られ、不登校時に昼夜逆転や生活の乱れが見られた生徒に高校で登校不良な状態にある生徒が多かった。この結果は、生活リズムが比較的規則的である場合

に再登校の可能性が高いことを指摘した岩本(1996)の結果と一致するものであり、不登校時に生活面を支援することが重要であることが示唆された。次に、不登校に対する今の気持ちは、不登校時の「ひきこもり」「無気力」「抑うつ状態」の有無によって差が見られ、不登校時にひきこもり、無気力、抑うつ状態が見られた生徒に「いつ戻るかわからない」「考えない、考えないようにしている」という生徒の割合が高く、これらの結果は、不登校の改善に関連する要因として対人積極性を増すことを指摘した小林ら(1995)の研究や抑うつ症状が関連することを指摘した斎藤(2000)の研究と一致するものであると考えられる。高校での登校状況には、「昼夜逆転や生活の乱れ」という登校にあたっての生活リズムの問題が関連し、不登校に対する今の気持ちには、抑うつ状態や無気力など不登校の経験を考え、意味づけていくための心的なエネルギーの問題が関連していることが推測され、不登校からの回復を支援するためには継続した登校が可能になるように生活面を整えていくための支援と、不登校経験を意味づけていくことができるような心理面からの支援を行っていくことが重要であると考えられる。

また、不登校に対する今の気持ちがどのような状態であるかによって、不登校経験による成長の実感にも相違が見られることが示唆された。「もう不登校時代に戻らないと思う」と感じている生徒は、不登校経験から何らかの成長を感じ、不登校経験をポジティブにとらえる項目の得点が高いのに対し、「いつ戻るかわからない」「考えない、考えないようにしている」と感じている生徒では、不登校を経験したことによる不利益や後悔に関する項目で得点が高いという傾向が見られ、特に、「もう不登校時代には戻らないと思う」と感じている生徒は、「いつ戻るかわからない」と感じている生徒に比べ、自分自身を見つめ直すことができた、休んだ期間があるからこそ今の自分がある、いろいろな人と出会えたなど不登校経験を自分が成長した機会としてとらえていることが示唆された。こうしたことから、不登校経験者への支援として自信を取り戻すことができるような支援をして

いくことが重要であると思われる。

今後の課題として、今回の調査では不登校期間の長さとは不登校からの回復状況には関連が見られないという結果であったが、不登校になった時期やきっかけなどの要因も加え、より詳細に検討を行う必要があると考える。また、不登校に対する今の気持ち、不登校経験による成長の実感についても、通信制高校入学後にどのような過程を経て意識が変化してくるのかなど、生徒の変化の過程にも着目した検討が必要であると考えられる。

引用文献

- 伊藤美奈子・小澤昌之・安田崇子・星野千恵子・福智直美・近兼路子・原聡・鶴岡舞(2013). 不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連——通信制高校に通う生徒を対象とした調査から——. 慶應義塾大学大学院社会学研究紀要, 75, 15-30.
- 岩元澄子(1996). 登校拒否児の学校適応という視点からの予後予測. 児童青年精神医学とその近接領域, 37, 331-344.
- 片岡栄美(1993). 学校世界とスティグマー定時制高校における社会的サポートと学校生活への意味付与. 東学院大学人文科学研究所報, 17, 51-93.
- 小林正幸・鈴木聡志(1990). 半記述的チェックリスト法および多変量解析法による思春期登校拒否事例に関する研究(1)——改善の程度に及ぼす要因の検討——. カウンセリング研究, 23, 119-132.
- 小林正幸・田中陽子・神村栄一(1995). 不登校事例の改善に関する研究——登校行動改善の規定要因——. カウンセリング研究, 28, 131-142.
- 公益財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会(2012). 平成23年度文部科学省委託事業「高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究」.
- 文部科学省(2013). 定時制・通信制課程について.
- 文部科学省(2014). 平成25年度「児童生徒の

問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について.

斎藤万比古（2000）. 不登校の病院内学級中学校卒業後10年間の追跡研究. 児童青年精神医学とその近接領域, 41, 377-399.
